

平成28年度 非核平和広島派遣事業

— (感想文) —



愛 西 市

原爆ドーム前



平成28年8月5日(金)～6日(土)

<p>生徒</p>	<p>(佐屋中学校) 岩井 亮磨 加藤 勇多 河村 凜花 堀田 胡桃 (永和中学校) 小田 一貴 横井 幹太 井谷 妃那 奥村 采実 (立田中学校) 清水 大輝 中嶋 恭佑 金子 来未 鈴木 美羽 (八開中学校) 大森 康平 安田 圭佑 加藤 千智 丹羽 ののか (佐織中学校) 伊藤 大晟 佐藤 蒼大 浅野 渚彩 森 千友妃 (佐織西中学校) 伊藤 陽 大槁 圭吾 川口 映美理 平林 千聖都</p>
<p>引率者</p>	<p>中野 雄大 (佐屋中学校) 伊藤 ちあき (永和中学校) 井本 直樹 (立田中学校) 竹島 栞 (八開中学校) 門脇 しおり (佐織中学校) 井手 瑞樹 (佐織西中学校)</p>

(敬称略・順不同)

「真の平和」を

佐屋中学校 岩井 亮磨

1945年午前8時15分、一発の原子爆弾が広島のにんに投下されました。

青空を切り裂いたきのこ雲の下では、幾万という人々が炎に焼かれ、命を奪われ、建物も自然も、全てを破壊してしまった……。無数の遺体が川に浮かび、かろうじて田舎に疎開していた子供たちは、生き延びたものの、戦争孤児となり、生きるために人としての良心を捨て、辛くゆがんだ人生を歩まなければならなかったと聞きます。

また、その後、放射能汚染による心身の後遺症、さらに人からは差別を受け、苦しみ続ける地獄の日々を送った被爆者たち。平和記念資料館に収められたたくさんの遺品や残酷な写真が、僕にそのときの惨劇を、そして悲痛な叫びを訴えかけているような気がしました。

今年の平和記念式典には、91か国からの参列がありました。被爆70年を迎えた昨年の100か国に次いで、2番目に多い参加国数だそうです。

「核なき世界」への機運が高まっていることは、本当に素晴らしいことだと思います。広島市長は、核兵器のことを「絶対悪」という言葉で表現されていました。「絶対悪」は決して使用されてはいけません。こんな残酷なことは、二度と繰り返してはいけません。それには、「絶対悪」を世界からなくす勇気を核所有国が一斉にもたなければ実現しません。

僕は「真の平和」が生まれ、平和記念公園の「平和の灯」が消される、そんな日が来ることを心から願います。そして、今回学んだ数々の忌まわしい過去の事実を1人でも多くの人に語り継ぎ、「真の平和」を訴え続けることが、広島派遣に参加した僕に与えられた使命だと、強く感じました。

幸せな普通があること

佐屋中学校 加藤 勇多

今回僕は、非核平和広島派遣事業に参加させていただいて、たくさんのことを学ぶことができました。

今まで原子爆弾という存在は、戦争を体験したことのない僕にとって恐ろしいものではあっても、どこか現実のように感じられませんでした。しかし、最初に行った袋町小学校平和資料館で、実際に焼けた当時のレンガや壁に書かれた文字を見て、本当にあったこの悲しい事実を、現実のものとして実感することができました。きっと僕と同じ気持ちの人は少なからずいると思います。なので、少しでも多くの人にどんなことがあったのかを、きちんと知ってもらいたいと思います。資料館や平和記念公園を回っていてとても印象に残っていることが2つありました。

1つは、袋町小学校平和資料館の壁に記された伝言です。その1文字1文字に込められた思いや、必死に家族を探している人の姿を想像すると、すごく苦しくなりました。僕には弟が1人います。弟がまだ保育園に通っていたとき、迷子になってしまったことがありました。あのとき僕は、言葉にできないぐらい心配して、手当たり次第に探していました。単なる迷子とは状況は違いますが、きっとチョークで伝言を残した人たちも同じような気持ちだったのではないだろうかと思います。

2つ目は、見学している人の中に、外国の人がたくさんいたことです。平和記念式典に参加している外国の人たちから、世界中に核兵器をなくし、平和を心から願っている人がたくさんいることを教えてもらったような気がしました。

僕たちは、原爆の恐ろしさを学ぶことができましたが、実際に被爆した人たちに比べたら、何も知らないに等しいかもしれません。今、僕たちがご飯を食べ、笑い、勉強をして、寝る。この時間がどれだけ喜ばしいことなのか。今、この作文を、静かな部屋で書いていられることさえも幸せなのだと気づきました。

私たちにできること

佐屋中学校 河村 凜花

世界で初めて原子爆弾を投下された広島。そこで私はたくさんものを見て、たくさん
のことを学びました。

袋町小学校平和資料館には、被爆当時に記された「伝言」や原子爆弾の風圧によって破
れてしまった太鼓が展示されていました。それを見て原子爆弾がもたらす被害の大きさ、
悲惨さを学びました。その後、原爆ドームを見ました。私が実物の原爆ドームを見たのは
これが初めてでした。実際に目の前にしてみると、まさにそこだけ時間が止まっているよう
に感じました。そしてそのまま平和記念公園に行きました。そこにはたくさんの折り鶴が
奉納してあり、私たちも千羽鶴を奉納させていただきました。数えきれないほどの折り鶴
が示すのは、平和への祈り。こんなにもたくさんの方が平和を望んでいる。それなのに世
界には戦争をしている国があります。資料館で戦争の悲惨さを知った後だったので、それ
はとても悲しいことだと思いました。

次に、平和記念資料館を見学させていただきました。そこには実際にけがを負った人の
写真や、原子爆弾が投下された8時15分をさしたまま動かなくなった時計など、原子爆
弾の恐ろしさを知るには十分なものばかりが展示されていました。

次の日に参加させていただいた平和記念式典での話も合わせ、戦争はとても恐ろしく、
悲惨なものだと知りました。だからこそ、このような過ちは二度と繰り返してはならない
と思いました。そのために、私たちができること。それは、当時の様子を知り、次の世代
に伝えていくことではないでしょうか。

広島派遣で学んだこと

佐屋中学校 堀田 胡桃

私は今まで平和について「当たり前のことができること」が平和だと思っていました。しかし、今は違います。

広島に行き、「今、原爆が落ちて全てが破壊されたら」「2000度という熱の中にいたらどれほど熱いのだろうか」と考えるようになりました。しかし答えは見つからず、想像するだけで怖くなります。今、この瞬間にこのような気持ちを抱えている人が世界のどこかにいると考えたとき、自分の周りだけが幸せでいいのだろうか。また、核兵器が世界に何千とあるのに、どうしてこんなに自分の周りが幸せなのか、と疑問に思いました。

それは日本がとても恵まれていて、戦争をしていないからだと思います。本当に私は幸せだ、と原爆ドームを見て感じました。しかし、原爆ドームは、もっと大事なことを伝えるために遺されているのだとも思います。人それぞれに感じ方は違うと思いますが、私は原爆ドームから、人間の醜さを感じました。

なぜ戦争が起こったのか。人間の黒い部分が明るい心の部分も覆ってしまったからだと思います。人種差別、宗教の対立、野心、名誉、金銭欲……。人間誰もがもっているものだと思うので、誰も誰かを責めることはできないと思います。どこの国が原爆を落とした、誰がやった、というのは関係ないと思います。

こう考えると、日本も平和とはいえないような気になってきます。私の周りには、小さな戦争が起こっているのだと気づきました。いじめや人間関係のいざこざなども、小さな戦争ではないかと思うようになりました。いじめは人が武器になり、相手を攻めます。言葉は鉄砲・爆弾となり、相手の心を、ときには体をも殺してしまうこともあります。これは、戦争と同じではないでしょうか。人の醜い部分が、自分自身を覆い尽くして武器にしてしまう。私自身にも、このような経験が多くあります。

戦争ゼロや核兵器なき世界を作るなど、私たちには大きな課題がありますが、そんな大きなことではなく、「身近な人とのトラブル」「自分の欲求」などの、小さなことへの対処の仕方から身につけていかなければならないのだと思いました。

今、日本は戦争をしていませんし、世界中の誰に聞いても「日本は平和な国だ」と答えると思います。ですが、私は広島派遣を通して、日本には小さな戦争があると気づき、少しでも自分の黒い部分を明るくしていこうと思うようになりました。世界の多くの人がこのような気持ちをもてば、世界が少しずつ明るくなっていくと思います。

広島派遣事業を終えて

永和中学校 小田 一貴

僕はこの広島派遣で改めて戦争の恐ろしさを感じました

広島に落とされた原子爆弾は熱線・爆風・放射線を発生させ、数十万人の命を奪いました。そのことを知った時はいかに原子爆弾の威力がすごかったかが分かりました。

一瞬で死ぬ。この原子爆弾が落ちなければ広島の人々は生きていました。生きたくても生きることができませんでした。広島の人々の気持ちを背負いただ真っ直ぐに生きていきたいです。

平和記念資料館にはたくさん展示してありました。黒こげのお弁当箱、破れた衣服、原子爆弾の影響で亡くなられた方の遺髪。一瞬で物を破壊する恐ろしさを感じました。

平和記念公園では原爆慰霊碑の前で献花をしました。そこには、「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返しませんから。」と刻まれていました。自分がこのまま平和維持しないといけないという責任感を感じました。

平和祈念式典には、世界各国から多くの参列者がいました。平和を願う気持ちは世界共通だと思いました。

広島原爆投下から七十一年。被爆者の平均寿命は八十歳を超え、自らの体験を語る時間は減ってきています。被爆者の思いを伝えるには僕たち若い人が伝えなければなりません。戦争の知らない人、世界中の人々へ伝える責任があります。自分もこの体験を学校の生徒に話し、平和について考え、周りの人達に伝えていきたいと思います。五月には、アメリカのオバマ大統領が訪問しました。

「核兵器のない世界」

「戦争のない世界」

世界平和はこれからが大事です。世界中の人々が平和について考え、世界を平和にしていきたいです。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

平和とは

永和中学校 横井 幹太

一九四五年に日本に原爆が投下された時に大きな被害を受けたのが広島産業奨励館、今でいう原爆ドームです。今回の広島派遣事業でそんな原爆ドームに訪れ、感じたことは原爆の力です。原爆ドームは骨組みとボロボロの壁でできていて他の世界遺産のような華やかさや、美しさはありませんでした。けれども、ボロボロの壁や骨組みには他の世界遺産では感じる事のできないものがありました。それこそが、原爆の力です。たった一発の原爆が一瞬で原爆ドームの色や形を奪い去ったのです。原爆ドームを見ることで、戦争の恐ろしさをしみじみと感じました。僕達の子供や孫の代、さらに先の代まで平和の象徴として原爆ドームを残して、二度と同じ過ちを繰り返さないことが今の僕達ができることだと思います。

しかし、戦争や原爆の恐ろしさを伝えているのは原爆ドームだけではありません。平和記念資料館もそのうちの一つです。資料館内には多くの展示物があり、その一つ一つが痛々しいものでした。その中でも印象に残っているのは原爆によって焼け残された人の爪や皮膚です。これを見た時、僕は目を背けてしまいました。原爆が落とされた時は、このような光景が色々な場所で見られていたと思い戦争の恐ろしさをここでも痛感しました。

原爆ドームや平和記念資料館以外でも多くのことを学び、色々なことを感じました。どの場所でも戦争の恐さを常に感じていました。

今回の広島派遣事業を通じて、改めて戦争とは何かを知ることができました。戦争は多くの命や幸せを奪うだけのもので、戦争をしたところで何も利益は生まれません。また、戦争によって起こった悲しい現実の中には知りたくないことも少なくはないと思います。けれども、今の僕達は戦争のもたらした現実にはしっかりと向き合い、後世へとそれをつなげて、もう二度と戦争を起こさないようにしていかなければならないと思います。

「ヒロシマ」

永和中学校 井谷 妃那

一九四五年八月六日、広島に原子爆弾がおとされました。なぜあの日、原爆は投下されたのでしょうか。一瞬にして街のほとんどが壊滅し、多くの尊い生命が、奪われました。黒こげになった弁当、焼け焦げた女子学生の夏服、人影が写った石、どれもが、原爆の脅威を物語っています。被爆者の中には、放射線の影響によって、何年も苦しんだ人がいました。佐々木禎子さんもそのうちの一人です。禎子さんは、二歳の時に爆心地から、約一・六キロメートル離れたところで、被爆しましたが無傷でした。しかし、被爆の九年後、突然白血病が発生し、入院しました。折り鶴を、千羽折れば、病気が治ると聞き、鶴を折りましたが、十二歳という短い生涯を終えました。禎子さんは、苦しみながらも鶴を折り、元気になりたいと思っていたはずです。私たちは、生命を重んじる考えを尊重しながら、生きていくべきです。そして、核兵器も、世界中から、なくさなければならないと思います。日本は、他国に核兵器の保持を促されていますが、平和のためにも非核三原則を守ってほしいと思います。そして、ヒロシマであった出来事は、私たちが、後世に伝えていかなければならないと思います。そのためにも、たくさんの人が、ヒロシマを理解し、苦しみや、悲しみを分かち合っていく必要があります。私は、死を知ること、生命の大切さや、生きる喜びを感じることができました。わたしが学んだことを、日本、いや世界の平和に役立てていきたいと思っています。そして、核兵器をこの世からなくす取り組みに積極的に参加し、世界が平和になるようにいろいろなことに努めていきたいです。

今回の、広島派遣事業で戦争について、深く学ぶことができました。戦争体験者の高齢化が進む中で、ヒロシマであったことは、人々に忘れられてはいけないと思います。私が、見て感じたことを、これから、たくさんの人に伝えていきたいと思っています。

平和

永和中学校 奥村 采実

平和ってなんだろう。私は二日間を広島で過ごしてこう思いました。何を勉強したんだと言われるかもしれませんが、勉強したからこそこう思ったのです。戦争のない世の中、原子爆弾のない世の中は、罪のない人が苦しみ、傷つくことはありません。だから、その世の中こそが平和だと言う人もいるでしょう。しかし、本当の平和はそうではないと思います。世界には、自国を守るために核兵器は大切と言っている国もあると知りました。その考えがなくなり、全ての人が戦争のない世の中、原子爆弾のない世の中を望むことこそが、本当の平和だと思います。

平和記念資料館で見たとても小さな鶴。それは死ぬ間際まで最後の力を振り絞って折られたものでした。たくさんの恐ろしい写真や、焼き焦げた服などは、被爆した方が私たちのために展示してくださったものです。それらには、二度と私たちのような想いをしてほしくないという被爆した方の想いが込められていると思います。私たち日本人は、その想いを式典などを行うことで、受け継ぎたいと思っています。それは、語り部の方が想いを伝え続けてくださったからです。きっと伝え続ければ、他国の方にも伝わる日が来ます。実際、式典には、他国の方参列していました。少しずつ、想いが伝わり始めた証拠です。私たちが出来ることはただ一つ。被爆した方の想いを受け取り、世界へ伝えることです。

広島に着いても、たくさんの花が咲いていて、大きなビルが建っていて、原子爆弾が落とされたなんて想像できませんでした。私たちが住むこと変わらない、笑顔あふれたところでした。それは、昔の人の努力そのものです。その努力が無駄になる世の中にしてはいけません。いつか全ての人が、戦争のない世の中、原子爆弾のない世の中がくることを望むことを願っています。平和ってなんだろう。これは、一人ひとりが考えなければならぬ課題だと思います。私は、派遣事業で感じたこと、見たものを忘れず、この課題の答えを探し続けたいです。

「広島派遣を終えて」

立田中学校 清水 大輝

僕は、広島派遣に行って、平和について多くの事を学びました。広島では、初めに原爆の被害を受けた袋町小学校平和資料館へ行きました。その学校には、当時の物などが展示されていました。なかでも心に残っているのが、壁に書かれていた文です。そこには、自分の今いる場所が書かれていたり、家族へのメッセージが書かれていたりしました。そして、階段を上がるとそこには、何千何万のすごい数の千羽鶴が置かれており、なかには折り鶴で「平和」と描かれてあったものもありました。そして、袋町小学校を見学した後に原爆ドームを見に行きました。そこで感じたことは原爆の恐ろしさです。ドームを一瞬にして、ボロボロにしてしまった爆発の威力。そして、その威力を受けた広島市に住んでいた人達が、生死の間をさまよう恐ろしい光景が、頭の中に入ってきました。その時は、何をしたいのか分からなくなりました。そして、そのまま手に持った千羽鶴を平和記念公園内ある「原爆の子の像」の付近にある千羽鶴を捧げる所に納めてきました。広島での二日目は、平和記念公園で行われる記念式典に参加しました。そこで、平和のことをより深く知ることができました。こども代表の二人、安倍内閣総理大臣、広島市長、広島県知事などの言葉を聞いて、広島県の人々の「平和」の思いを知ることができた気がしました。広島の平和は「愛」なのではないかと思いました。家族への平和を願う愛、被災者を思う愛、亡くなった人達への愛。これらの愛こそが、広島の平和なのではないかと僕は思いました。広島では、たくさんのことを学ぶことができました。僕達が学んだことを次の世代、また次の世代へと繋ぐ一歩になったらいいなと思いました。

「広島派遣事業について」

立田中学校 中嶋 恭佑

まず今回の愛西市の広島派遣事業に参加できたことに感謝しています。本当に貴重な体験ができたと思います。この派遣事業で、原爆について学んだことをここに書きます。最初は、袋町小学校という場所に行きました。ここは、原爆の被害がとても大きく、ここも原爆ドームと同じように当時から残されている建物でした。この建物には、当時の物がたくさんあり、これほどかと思うぐらい原爆の破壊力の強さを知りました。資料館では、原爆の恐ろしさがさらに分かるさまざまな資料がありました。人の肌が溶けている写真や、当時使われていた服や物、または被爆した人の模型などがあり、どれも言葉には言い表せない物ばかりでした。原爆投下の被害は、計り知れないと思いました。式典では、広島市長による平和宣言が行われました。僕は市長の言葉で心に残ったのは、「被爆者の平均年齢は八十歳を越え、自らの体験を生で語る時間は少なくなっています。未来に向けて被爆者の思いや言葉を伝え広めていくには、若い世代の皆さんの力が必要です」という部分です。僕はこの言葉が鮮明に頭の中に残っています。もう原爆が日本に投下されて七十一年です。核兵器のない世界というものは、まだ実現されていません。しかし当時の被爆者達の声をおぼえてはなりません。核兵器の恐ろしさをこの後もずっと伝えていかなければならないのです。今日の派遣事業で僕は原爆、そして核兵器の恐ろしさについて知ることができました。この体験は自分にとってとてもよい経験となりました。今後の自分の成長につなげていきたいです。

「戦後七十一年の今」

立田中学校 金子 来未

私は広島へ行って、衝撃を受けたことは、やはり、原爆ドームです。写真でなら、何度も見ました。しかし、実際は壁なんて今にも落ちてきそうで、下の方は大きな瓦礫だらけでした。資料館では、ボロボロの服、被爆した方の写真、折り鶴がありました。ボロボロの服も、被爆した方の傷も一瞬の間にこうなってしまったと思うと、とても恐ろしいです。袋町小学校でも、真っ黒になってしまった壁に、文字を残して、連絡を取り合おうとした跡も当時の人達の気持ちが伝わってきます。式典にも参加しました。平和な今では考えられないような事が、八月六日、広島で起きてしまい、多くの命が失われました。その命を失った方々に対し、献花も行いました。この世から核がなくなる事は、遠い未来だとしても、その日まで、核が二度と使われないようにしなければならない、と改めて感じました。平和な今を生きている私達ですが、私は平和とは何か、それは、戦争がなく、自分も、その隣にいる人も笑顔でいられる事が平和なのだと思います。そして、平和を続けていくべきです。しかし、今は、その気になれば、戦争はすぐ起きてしまう。被爆した方の生の声も聞けなくなってしまう。だからこそ、私達が後の世代に伝え、今こそ、平和のありがたみ、大切さに気付くべきだと私は思います。八月六日、九日の出来事をありのままの歴史として伝えていけば、被爆した方の恐怖を、私が感じた衝撃を、もっとたくさんの方が、知ってもらうことができたなら、世界中の人が戦争の意味、平和の意味を知ってもらえたら、この世の平和が崩れることはないと思うし、戦争も、テロもなくなり、安心安全な世界が訪れる日も、そう遠くないと思います。そのためにも、わたしたちは、文章でも写真でも、実際にあったことを伝えていく必要があるのです。

「非核平和広島派遣事業で学んだ事」

立田中学校 鈴木 美羽

私は今まで戦争や原爆についてあまり関心がありませんでした。いつも八月六日になると何気ない気持ちでテレビなどを見ていました。しかし、今回の広島への派遣事業を通じて、原爆の被害の大きさや戦争の悲惨さ、被爆者の方々の苦しみを知りました。広島平和記念資料館に展示されている一つ一つの物に原爆の恐ろしさをまじまじと思い知らされました。当時の日常生活が原子爆弾の投下で、一瞬にして数え切れない人々と町並みが奪われていきました。そして、この出来事で助かったけれど、病気になってしまった方々も多くいます。資料館の中には、当時の衣類や三輪車、壁には人の焼けた痕が残っており、実際に自分の目で見て、胸が苦しくなる思いがしました。平和式典では、さまざまな所に平和への祈りがこめられた折り鶴がたくさんあり、多くの人々が原爆や平和について語り、今自分がここに居ることに感謝し、戦争のない世の中にしていくこと、平和の世の中でありたいと改めて実感しました。今年は、広島に原爆が投下されて、七十一年の年月が経ち、アメリカ大統領が初めて広島に来るという歴史的な年となりました。オバマ大統領は原爆が何を意味するのか、平和の大切さを伝えたくて、広島へ来たのかもしれませんが。私はこの非核平和広島派遣事業を通して、原爆の恐ろしさ、悲惨さを学び、この出来事を、忘れてはいけない出来事のひとつだと思いました。年月が経つにつれ、被爆者の方々は減ってきています。自分の目で見て、感じたことを次の世代の人達に伝えていくことが今、自分達に出来る役目だと思い、平和という言葉とその意味を大切にしていきたいです。これからは、広島や長崎で起こった出来事を忘れず、一日一日を大切に過ごし、戦争や核兵器のない平和な日々が続いてほしいと思います。これからの私にとってとても良い経験になりました。

平和な世界と子どもたち

八開中学校 大森 康平

僕は一年前、広島を訪れ、広島平和記念資料館を見学し、原爆死没者慰霊碑に祈りをささげました。一年前は戦争の恐ろしさと原爆のむごさを感じました。そして、今回もう一度広島を訪れる機会をいただきました。本当に光栄です。

今回、もう一度広島を訪れると決まったとき、僕は自分と同年代の子どもに注目しようと思いました。

原子爆弾が落とされた頃の広島の子どものはしたくもない戦争に巻き込まれ、命を落とした子どももたくさんいます。楽しいはずの人生を一瞬で奪う戦争は二度と起こしてはならないと痛感させられます。

八月六日の平和記念式典でこども代表の二人が発表した「平和への誓い」の中で特に心に残った言葉が

「私たちは待っているだけではいけないのです。」

という部分です。その通りだと思います。実際に被爆された方からお話がきけるのもあと数年です。だから、ヒロシマを学んだ僕たちが働かなければいけないのです。次の世代へ伝えていかなければいけないのです。もっとみんなで平和を考えなければいけないのです。そう確信しました。

世界に目を向けると、各地で紛争やテロが相次ぎ、多くの人が犠牲になっています。その中には僕と同年代の子どもも含まれます。子どもの大切な命を奪うような紛争なんてしないでほしいと感じます。

また、世界には自分からテロ組織に加わり戦闘員となったり、兵器を持って子ども兵士として紛争に加わったりしている子どももいます。こんな状態を平和とは呼べません。

世界平和を実現するため、争いのない社会をつくるため、僕がこの二日間で感じた平和への願い、まだ十四年しかたっていない人生の中で感じた戦争への憎しみを同じ世代の子どもに、次の世代に、世界の人々に伝えていかなければいけないと強く感じています。

また、もっと多くの人にヒロシマ、ナガサキを訪れてほしいと思います。そして自分の目で見て、耳できいて、平和を学び、感じ、平和の尊さを伝えてほしいと思います。

広島派遣を終えて

八開中学校 安田 圭佑

僕は、この広島派遣事業に参加することは普段考えることのないようなことを考えさせられたり、自分の今までの生活を見直す良い機会になりました。

たとえば、平和記念資料館で見た人形。体中の皮膚がただれていて、全身血まみれで、髪の毛は焼けこげてチリチリでした。まさに、アニメやゲームにでてくるようなゾンビを連想させられました。そのほかにも、被爆者が着ていた服や原爆投下時刻を指したまま止まっている時計、中身ごと丸こげになった弁当箱、強烈な熱線によって変形した鉄骨などがありました。どれも、いかに原爆の威力がすごかったかがよくわかるものばかりでした。現在は当時よりもさらに科学が進歩しています。原爆の威力も昔とはレベルが違うと思うので、今こんなものを落とされたら、と思うとゾッとします。

平和記念公園で献花をするときに、まわりをみると老若男女、国籍問わず、世界中から人が集まっていることに気付きました。やはり、平和に対する思いは、世界中どこをとっても同じなのだと思いました。献花をしている人たちは、みんな真剣な表情で、一人一人が平和に対しての思いをもち、胸に何か大きなものをかかえているように見えました。僕も、その人たちのように本気で心の底から平和を願い、献花をすることができたと思います。

こういった場所に行くと、今まで自分が過ごしていた何気ない平和な日常があることが、本当に幸せなことなのだという事に気付かされます。この平和な日常が続いていることに毎日、感謝して生きていくことが大切だと思います。

今後、この惨劇をもう二度と繰り返さないように、体験した人や知っている人たちが、しっかりと後世に語り継いでいくことこそが、大切なのだと今回の広島派遣を通して考えさせられました。

広島派遣事業を通して

八開中学校 加藤 千智

七十一回目の終戦記念日を迎えた今年、私は初めて原子爆弾が投下された広島を訪れた。これまで広島に行ったことはなかったため、今回初めて原爆ドームを自分の目で見た。その姿は、写真で見たものよりもすさまじいものだった。

外壁はくぼみ、窓枠はボロボロで、軽く触れただけで壊れてしまいそうな印象の原爆ドームは、原爆の威力と恐ろしさを物語っていた。原爆投下の瞬間、そこにいた人たちを想像すると、胸が苦しかった。きっと、これまでにないくらいの暑さの中、水もなく、多くの人が一瞬にして命を落としたのだろう。

平和記念資料館には、八時十五分で止まった時計、被ばく者の人形や写真などがあつた。皮膚が焼きただれ、全身にやけどを負った姿は、非常に恐ろしかった。その中でもとくに印象に残ったのが、佐々木禎子さんが折った折り鶴である。放射線による後遺症で白血病と診断され、約八ヶ月の闘病生活の末、十二歳と短い生涯を終えた禎子さん。彼女は、鶴を千羽折れば病気が治ると聞き、葉包紙などで鶴を折り続けたそうだ。生きたいという強い願いがこめられた鶴を見て、二度と戦争を起こしてはいけないと思った。

そのためには、私たちが後世に伝えていく必要があると思う。戦争体験者が一人もいなくなってしまう、戦争の恐ろしさを知らない者たちが戦争を起こしてしまうことがあってはならない。原爆ドームは、平和のための象徴である。核廃絶を願い、日本、そして世界へ訴えかける。こうした行動が世界恒久平和を創る第一歩であり、私たちは、これを積極的に行うことを託されたのではないだろうか。望むだけでは世界は変わらない。だからこそ、私たちが行動し、未来の平和も守っていききたい。

平和の尊さ

八開中学校 丹羽 ののか

私は、今回の広島派遣を通して、戦争について深く考えさせられました。教科書やテレビでは伝えられないような「何か」を、そこには感じました。

袋町小学校や原爆ドームからは、原爆が投下された当時の様子がありありと浮かぶようでした。特に、原爆ドームのむき出しになった鉄骨や崩れた壁は、原爆の恐ろしさを如実に物語っていました。戦争の悲惨さと、平和の尊さを同時に感じました。

一番強く印象に残っているのは、広島平和記念資料館に行ったことです。肌が焼け爛れている、虚ろな目をした被爆者の人形。顔面が焼けて目や唇がなくなった人の写真。資料を一つ一つ見ていくたび、胸が締め付けられる思いでした。殺すのも殺されるのも同じ人間なのに、何故人はこんなにも惨いことができるのか。今も不思議でなりません。

平和祈念式典の会場は大勢の人たちで溢れかえっていました。そんな中に外国の方も見かけて、どこの国も平和を祈る気持ちは変わらないのだということと、原爆のことが日本だけでなく、世界にも広く浸透しているという事実を嬉しく思いました。もっと多くの国に関心を持ってもらえれば、と思います。

学校の代表として広島派遣に行った私たちには、原爆の、戦争の惨劇を語り継いでいく責任があります。私たちが、今まで当たり前のようにしてきたこと。それは「当たり前」ではありませんでした。「当たり前」は、「平和」の上にこそ成り立つのです。それをみんなに伝えていくのは、実際に原爆について見て、聞いて、学んできた私たちの使命です。平和は、私たちの手で築き上げるもの。私たちが語り継がなければ。

広島派遣を通して学んだこと

佐織中学校 伊藤 大晟

自分が原爆ドームを一目見て感じたこと。それは「意外と小さい」でした。また、平和記念公園も、あまり広くないなと感じました。しかし、平和資料館に訪れたり、平和式典に参加したりするにつれて、原爆ドームの大きさだけではわからない、平和の大切さや意義を見つけ出していくことができました。

僕は、佐織中学校代表として、一つでも多くの平和への取り組みや人々の願い、戦争の悲惨さを感じ取ることができればよいと思い、この派遣に臨みました。実際に平和資料館では、原子爆弾の破壊力、その後の放射能の影響などについての多くの写真、展示物がありました。その一つ一つに悲しさの魂があるように見えてきました。特に、展示物の一つに被災者の日記がありました。僕は、その日記を読んでもみましたが、何が書かれているのか全くわかりませんでした。難しい漢字、くしゃくしゃの平仮名。解説を読みながらわかったことは、原子爆弾が落とされた後の何も残っていない情景、皮がめくれ、皮膚が溶け落ちてしまっている子供。想像ができませんでした。きっと僕だけでなく、平和な今の世の中では、この無惨さを想像できる同級生は絶対にいないと思います。だからこそ、平和の大切さを一人でも多く、僕たち若い世代に伝えていく必要があると思います。将来、日本が海外の戦争に巻き込まれてしまった時、被災者の言葉や原爆の恐ろしさを思い出し、一度踏み止まって考えなければいけないと思います。

僕はこの広島派遣を通して、平和への意義を見出す一步を踏み出すことができました。しかし、僕一人が考えていればよいというものではないと思います。世界の人々全員が考えて初めて「平和」が出来上がるのではないのでしょうか。僕はそんなことを学べた気がします。

戦争・原爆の恐ろしさ

佐織中学校 佐藤 蒼大

僕は、八月五日・六日に広島派遣事業に参加しました。今回の派遣に参加するまでは、戦争とは二度とやってはいけない恐ろしいこと、と言葉だけでしかわかっていませんでした。この派遣を通して、多くのことを学ぶことができました。

一つ目は、原爆ドームです。原爆ドームはテレビや新聞で見たことがありました。実際に行ってみると、写真ではわからなかったインパクトに胸が熱くなりました。原爆が落とされる前日までは使われていた、ここに人がいたのだと思うと、原爆がどれだけ危険なものかが分かりました。

二つ目は折り鶴についてです。折り鶴は平和の象徴として、今も多くの方が作り続けています。僕たちも折り鶴を奉納しました。奉納場所には多くの折り鶴があり、多くの方が広島を訪れているのだなと実感しました。夜になると、僕たちが奉納した鶴はもうなくなっていました。近くにいた方の話では、八月五日は被爆した前日ということもあり、五トン近くの折り鶴が奉納されたと聞きました。そのため、広島市の保管場所に定期的に持っていかれるそうです。その折り鶴の多さに驚きました。

戦争とは、地元の人々を恐怖や不安にさらすものだということを実感しました。今年、原爆が落とされてから七十一年がたちました。今回の派遣で、戦争で苦しんだ人を間近で感じることができました。今、その人たちはどのような気持ちなのでしょう。今年、米国の現職大統領オバマさんが広島へ訪れ、折り鶴を折って核兵器廃絶を訴えたそうです。現実にするのはきっと難しいと思います。でも、日本は唯一原子爆弾を落とされた国です。言葉だけでなく、被爆された人々の思いをもっと世界に訴えていくべきだと思いました。

戦争を「実感」として感じる

佐織中学校 浅野 渚彩

私は今回、非核平和広島派遣事業に参加しました。本当の「平和」とは何か、また、今を生きる私たちが担う役割は何かを深く考えさせられる旅となりました。

被爆から十一年目を迎えた八月六日、この緑に包まれた広島を初めて歩いてみて、本当にこの場所でたくさんの命が一度に奪われる悲惨な歴史があったのかどうか疑問に思いました。

しかし、平和記念公園に一步足を踏み入れると、教科書で見たことのあるあの原爆ドームが目に飛び込んできました。想像より大きなドームは、壁は焼け焦げ崩れ、ぐにやりと曲がった鉄骨がむき出しになっていて、生々しさを感じました。そして、戦争時の凄まじい被害と原爆の恐ろしさを痛感しました。一瞬にして、平凡だが温かく、ささやかな幸せを奪われた人々はどんな思いだったのだろう。私にとって戦争は、今まで教科書やテレビでしか見たことがなかったはるか昔の「遠い過去」の出来事だったのですが、この広島で戦争のことを学ぶことによって、「決して忘れてはならない遠くない過去」に思え、ぎゅっと胸が締め付けられる思いがしました。

平和記念公園には、「平和の灯」があります。中央の炎が消される唯一の時は、世界から核兵器がなくなる時だそうです。今年五月に行われたサミット後の現職米大統領初の広島訪問をしたオバマ大統領も「核兵器のない世界」を自ら提唱し、この広島で、声なき叫び声に耳を傾けました。

起こってしまった悲惨な歴史は変えられませんが、過去から学ぶことはできます。世界で唯一の被爆国として現代に生きる私たちが、被爆者の思いをバトンとして受け取り、そのバトンを後世につなぐことが世界平和の一步になると思いながら式典の鐘の音を聞きました。「平和の灯」、いつか消えてほしいです。

平和へ

佐織中学校 森 千友妃

私は広島派遣活動に参加しました。原爆ドームや原爆資料館を見学したり、式典に参加している人や街の様子を見たりしました。そこで、「戦争や原爆は命を奪うだけではなく、そこで暮らしていた人々の笑顔や友情、たくさんの思い出も奪ってしまうこと」、そして「つらい思いが何年も続いてしまう大変なものであること」を強く感じさせられました。

私が最も印象に残っているのは、袋町小学校の見学です。原爆被害にあった小学校で、たまたま遅刻をして偶然に命が助かった小学生は、生き残ったものの、その後死ぬよりつらい思い・悪夢を見ながら生き続けたそうです。生き残ったのに、つらい思いを抱えながら人生を生きるなんて…と思いました。実際に式典では、今も悲しみを抱えている被爆者の方がたくさんいらっしゃることを目にしました。その人々の経験や思いがあったからこそ、今まで日本は平和でいられたのだと気づきました。

原爆資料館や式典に多くの外国人がいたことも印象的でした。戦争は全世界の課題です。今以上にたくさんの外国の方に広島に来てもらい、その悲惨さを感じ取ってほしいと思いました。

日本には広島のほかにも長崎に原爆が落とされています。広島や長崎、そして戦争で多くの悲しみを体験した人の思いを無駄にしないように、知っている人から平和への発信をしていかなければと思いました。

私たちは、広島で学校のみなどと折った鶴を奉納してきました。「平和でありますように」という願いと、戦争で亡くなった人への祈りを込めた大切な千羽鶴です。みんなの思いが、これからの世界の平和につながるといいなと思います。

非核平和広島派遣事業に参加して

佐織西中学校 伊藤 陽

僕は、今回このような事業に参加できたことにとっても感謝し、光栄に思います。この体験ができたのは、愛西市をはじめ、他の学校の先生や生徒のみなさん、そして佐織西中学校の先生や生徒、それに家族の協力があったからこそ、僕は体験することができたのだと思います。そして僕は今回の事業でとても多くのことを学びました。僕はみなさんに広島が受けた被害と現在の広島のことについて知ってほしいと思います。

まず僕たちは袋町小学校平和資料館という所を見学しました。そこには当時の壁がそのまま使用されており、その壁は自分の身の安全を知らせるために、黒板のかわりとして使われていました。今もなお残るその字は、当時のことを物語っていました。あまりに衝撃的すぎて、僕はただただ驚くばかりでした。

続いて僕たちは原爆ドーム、平和記念公園、平和記念資料館を見学しに行きました。原爆ドームは実際に見ると、やはりテレビや画像で見ると違い、建物そのものが惨状を物語っていました。原爆ドームは、今の僕たちに二度とこんなことがないようにと、訴えているかのようでした。

平和記念公園では、参拝する方の列が絶えず、小さい子供からお年寄りの方、また、外国の方までいらっしゃいました。年齢や国籍を問わず、より多くの方がこの惨状を知ること、次の世代に継承できると思います。当時の物や写真、模型などを展示することで、どれほどひどいものだったのかをみんなに知ってもらうことができます。平和記念資料館は、次の世代の人達に継承するという役目を担った貴重な施設だと思います。広島に残る一つ一つの物が当時の想いを物語っていたように感じました。

二日目に出席した平和記念式典には、たくさんの団体や外国の方々を訪れていました。

外国の方々が参列することで、広島で起きた惨状を、世界中の人々に知ってもらうことができます。僕は、式典に参加した外国の方々は、どのような思いを抱いたのか、知りたくなりました。さらに、被害者の方々の人数は年々減ってきています。伝える人が減っていく中、惨状を後世に残すためには、今の僕たちが広島で起きたことをもっと知る必要があります。みなさんに被害者の方々の思いを伝えるのは、僕たちにしかできないことだと感じました。

世界中に核兵器がある今、本当に平和と言えるのでしょうか。本当の平和とは何かを世界中で考えるべきです。今回の体験で本当の平和とは、身の危険を感じる事のない生活ができることだと思いました。この幸せがいつ終わるか分からない。そんな現状では本当の平和は一生訪れないと思います。もう一度、本当の平和とは何か、深く考えるべき時が来ていると思いました。

「平和な世界を築くため」

佐織西中学校 大橋 圭吾

現代を生きる私たちは戦争や核兵器の恐ろしさを知らない。地球には、まだ核兵器が約一万五千三百五十発も存在している。いつ日本にまた原爆が落ちてきてもおかしくない。そんな時、現代を生きる私たちは何を思うだろうか。

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に原爆が投下された。強烈な熱線と放射線が四方へ放射されるとともに、周囲の空気が膨張して超高压な爆風となり、何十万人という死者が出た。その恐ろしさは、資料館や原爆ドームから伝わってきた。資料館では、被爆者の髪の毛や衣服などが飾られていた。どれも残酷で信じがたいものばかりであった。原爆ドームは壁が壊れている部分もあり、今にも壊れそうだった。

原爆ドームの壁が打ちくだかれる程の熱風を浴びた被爆者はどんな痛みを味わいながら死んでいったのだろうか。また、焼きただれて変わり果てた家族や知人の姿を見た人たちは、どんなことを思ったのだろうか。僕たちには想像もつかない、きっと、本当に辛い思いをいただろう。そして、僕は二度と戦争は起きてはならないと改めて実感した。

はっきり言って僕は、戦争なんて他人事だと思っていた。実際、現在の日本は平和であり、たとえ外国で激しい内戦が続いても日本には関係ないと思っていた。けれども、当時のアメリカは日本人が油断しているすきを狙った。僕は油断から犠牲が生まれると思う。今の日本と八月六日の日本は少し似ていないか。では、どうやって核兵器から身を守ればいいのか。もちろん日本が核兵器の存在を忘れない事も大切だ。しかし、原爆が無ければ日本は核兵器の事なんて考えなくてもいいはず。現在核兵器を保有している国はロシア、アメリカ、インドなどたくさんある。なぜ原爆を持っているのか、何のために使うのか。きっと人類を不幸にしてしまう。僕は聞きたい。また、戦争をする気なのか。少しでもそんな考えを持つ人が減るように、原爆の恐ろしさを伝えていきたい。だが、日本だけでなく、どうやって世界へ発信するかがこの先重要になってくると思う。

年々、被爆者の方々は減っている。つまり、もう戦争を実体験している人がいなくなるということだ。だから少しでも多く、戦争の恐ろしさを知り、伝えていきたい。そして、この地球から戦争、そして核兵器がなくなった時、世界中の全員が笑って平和だと言えるようになって欲しいと願っている。

非核平和広島派遣事業

佐織西中学校 川口 映美理

はじめに、今回の平成二十八年度非核平和広島派遣事業に参加させて頂き、本当に光栄に思います。ありがとうございました。

私がこの広島派遣で一番印象に残っているのは、やはり、平和記念式典への参加です。以前テレビで見た時の印象とは全く違いました。八時十五分の黙とう・平和の鐘、広島市長による平和宣言、普段はなかなか聞けない内閣総理大臣のスピーチなど、参加してみて初めてわかるその場の空気や緊張感がありました。

広島のごども代表による「平和への誓い」での、小学生の堂々とした誓いの言葉は、迫力があって、心に響き、とても共感しました。私たちが、この原子爆弾の苦しみや悲しみを次の世代や世界に伝え、平和な世界を守らなければならない、そう強く感じました。あの場にいた多くの人々の非核への誓い、平和への祈りを肌で感じる事ができました。

二歳の時に被爆し、その十年後に白血病で亡くなった、佐々木禎子さんがモデルの「原爆の子の像」に、千羽鶴を奉納に行ったことも思い出深い出来事です。折り鶴には、病を治したいと願う禎子さんの祈りが込められていました。薬包紙で折られた鶴は平和資料館に展示されています。一三〇〇羽にもなった折り鶴に禎子さんの「生きたい」という必死の願いを強く感じました。そして今、折り鶴は平和を願う象徴になっています。「原爆の子の像」の周りにはたくさんの折り鶴が寄せられていました。平和を願う声が日本だけではなく、海外からも聞こえたような気がしました。

また、平和資料館の中に、来場者の視線をひときわ集める折り鶴がありました。人類史上初めて原子爆弾が投下されて七十一年。今年は、米国の大統領が初めてヒロシマを訪れた年でもあります。大統領によって折られた鶴は、ガラスケースに収められて展示してありました。丁寧に折られた四羽の鶴は、平和な未来へと羽ばたいていこうとしているようでした。

私は原爆ドームや広島平和記念資料館を訪れるのは二度目だったのですが、家族と訪れた時とは全く違う印象を受けました。以前は、展示資料は目を背けたくなるほど悲惨なものばかりで、怖く恐ろしいという感想でした。今回は、戦争や原爆投下について学んだうえで、さらに、非核平和広島派遣事業の一員として訪れたことで、ヒロシマの悲劇から目を背けてはいけないという思いで見学できました。平和のバトンを引き継いでいくことが、私たちの役目です。七十一年前の、あの日を体験した人が減っていく中で、未だに後遺症に苦しむ人がたくさんいます。長い間、その当時の事を語れないほどの心に傷を負った人もいます。心も体も苦しめる核兵器。二度と悲劇を起こしてはいけません。

「安らかに眠って下さい。過ちは繰り返させぬから。」

これは、原爆死没者慰霊碑に刻まれている言葉です。原爆で犠牲になった方への冥福を祈り、戦争という過ちを再び繰り返さないことを誓う広島人の心です。世界中から核兵器がなくなる日。そんな日が一日でも早く来てほしい。今回の非核平和広島派遣事業で学んだことによって、その思いがより一層強くなりました。

非核平和広島派遣事業に参加して

佐織西中学校 平林 千聖都

七十一年前の明日も、こんなカラッカラの晴天に空から死が降ってきたのかな。

原爆投下から七十一年を迎える前日に降り立ったヒロシマ。むわんとした熱気が、私を包みました。

私が特に印象に残ったのは、平和記念資料館です。私は今回ここを初めて訪れました。その理由として、母は、「まだ早いかな、と思った。こわいところとかがたくさんあるから。」と言いました。広島に向かう前日にも、「無理しなくていいからね。」と言われました。そんなことを言われて向かった、平和記念資料館。最初に目に飛び込んできた写真は、大きな大きなキノコ雲の写真でした。そこからどんどん進んでいくと、あの有名な被爆再現人形の前に立ちました。ボロボロの衣服、生気を失ったボンヤリとした瞳、そして何より、腕から垂れ下がった、とても肌とは思えないドロドロのもの。そんな人たちが、水を求めて歩いていました。きっと、母の言った恐怖は、これのことだろう、と思ったけれど、私は思っていたより恐怖を感じませんでした。その理由は、あまりに人からかけ離れた姿だったからです。しかし、七十一年前、このような人はたくさんいたのです。この人たちが必死に生き延びてくれたから、語り継がれて今があるのです。私は、この他にも、放射線の影響によって抜けてしまった髪の毛、黒く変形した爪、ボロボロになった制服など、展示してあるほとんどのものを写真におさめました。それは、一つ一つをじっくり見て、残したいと思ったからです。私には、その一つ一つが、「私のようにならないで、繰り返さないで」と訴えているように聞こえました。

平和記念式典もあるからか、訪れた場所で、たくさんの外国人を見ました。最初に訪れた袋町小学校平和資料館では、目を潤ませながら写真を見る外国人女性がいました。平和記念資料館には、展示品を見ながら会話をする外国人の親子がいました。そして何より、平和記念式典では、同時通訳の機器を耳につけて話を聞く外国人がたくさんいました。外国のテレビカメラもいました。こんなにたくさんの外国人が、広島に来て、何かを知り、感じている。七十一年前の日本は、こんなこと、想像できたでしょうか。私は、もっとたくさんの外国人が広島に、ヒロシマを訪れ、戦争や原爆の恐ろしさを知ることが、世界平和に繋がると思います。

原爆死没者慰霊碑には、こう刻まれています。「安らかに眠って下さい 過ちは 繰り返しませぬから」二度と繰り返してはならない悲劇。新聞の見出しにあった「核のない世界へ」言うだけでは何も変わらない言葉。すべてを行動に移し、担っていくのは、私たち、これからの未来を生きる者なのです。より多くの人、より多くの国が行動に移すことが、世界平和に繋がると私は思います。

最後に、今回このような素晴らしい事業に参加させていただいたこと、心から感謝しています。ここで学んだことを、少しでも多くの人に伝え、そして自分の将来に繋げていきたいと思っています。本当にありがとうございました。

